

持続可能な福祉社会の実現を考える

—読売新聞「とちぎ寸言」内容—

開倫塾

塾長 林 明夫

1. はじめに

おはようございます。開倫塾塾長の林明夫です。今朝も「開倫塾の時間」をお聴きいただき、ありがとうございます。

読売新聞の栃木版に「とちぎ寸言」というコラム欄があります。ここに、栃木県の発展を願い、また、県民生活の向上を願って、12名が交替で提言などを書かせていただいています。

私もその12名の一人で、今回は「福祉社会を実現するために」という内容で文章を書かせていただきました。それが今週の水曜日、2月2日の「とちぎ寸言」に掲載されましたので、少し紹介させていただきます。

2. これからの日本は、大変な財政難の中で高齢化社会を迎えます。特に、現在60歳代の団塊世代の方々が75歳過ぎになるのは2025年で、今から15年後です。その大変な状況を迎える前にどのようなことをしたらよいのか。今話題に上がっている痛みを伴う改革である消費税の増税・学校の先生を含む公務員の人員削減を実施する前に、私たちの意識を変えたりよく考えたりすることでできることもあるのではないだろうか。そのような立場で、私はいくつかの提言をさせていただきました。

3. 非常に言いにくいことですが、例えば胃瘻(いろう)やチューブ漬けの医療、つまり終末医療を長い期間行くと大変なお金がかかります。お金がかかるからやらないほうがよいというのでは決してありませんが、終末医療はあまりにもお金がかかるため本人も家族も大変です。もしかしたら、医療に携わるお医者さんや看護師さんなど大変ですし、あるいは納税者、つまり、国や地方の大変かもしれません。

4. このようなことを考えに入れて、患者さんやその家族の方々が自然死を選択するという事は、人間の尊厳に反しないのではないかと私は思います。実際に、ヨーロッパ、その中でも特に北欧の国々やフランスでは、物が飲み込めない状態になったときには無理に身体の中に食べ物を入れることをしないということをお聞きしました。

5. これもまた言いにくいことですが、認知症も寝たきりもいろいろな努力をすることでかなり避けられるという話をお聞きしています。一方で、認知症や寝たきりになってしまわれた方々も頑張れば回復できるということも聞きます。ですから、認知症や寝たきりにならないために、本人も努力し、家族や医療・介護の専門家も今まで以上にサポートする、これができないものだろうかと考えます。

6. また、自力での排泄はトイレの改造によって随分と助けられるということもお聞きします。ですから、行政はトイレの改造費用の助成を行ってはどうか、所得税からの控除ができないものかと考えます。私はそうなればありがたいと思います。
7. 欧米では大学やコミュニティ・カレッジでの高齢者の学習が大流行しています。大学で学ぶ高齢者の皆さんは元気で明るく、すがすがしい生活を送っています。ですから、できれば日本でも高齢者の皆さんの大学やコミュニティ・カレッジでの学習に奨学金・奨励金を出してはどうかと考えます。
8. このような経済状況ですから、ショッピングセンターをはじめとする様々な商業施設や工場などがどんどん空き家になっています。そのまま放っておくとゴーストタウンになって街が亡びてしまいますので、都市再生の一環として、それらの施設を利用して介護施設やフィットネスクラブ、そこで勉強のできるコミュニティ・カレッジなどを組み合わせたものを作り、高齢者の方々の生き方を変えることができないかと考えます。
9. さらに、すべての企業は、85歳過ぎまで働くことのできる職場を提供して地域の労働参加率を向上させることを、超高齢化社会という課題を解決するためのCSR・社会的貢献活動として目指すべきではないかと思えます。
10. ところで、ロシアにはダーチャと呼ばれる都市近郊の農地付き別荘で週末を過ごす方がたくさんいらっしゃるそうです。このダーチャのおかげで、経済危機のときに食べ物に困らなかった人が多かったともお聞きしました。土に親しむ人は皆さん元気です。いざという時のためにも、この放送をお聴きの皆さんの居住地別に、例えば栃木県版、群馬県版、茨城県版、埼玉県版という形でのダーチャづくりを本格的に研究して、50歳以上の全県民の皆さんに県として奨励してはどうかと考えます。これはTPP対策にもなると思えます。
11. 私も含めた団塊の世代が75歳を迎える2025年が、国や地方自治体の財政危機のピークになると言われています。そのときまでに、社会に負荷をかけない、つまり税金をあまり使わない・できるだけ税金のお世話にならない生き方を一つでも多く身に付けて実行することが、持続可能な福祉社会を実現するために私たち団塊世代の一人ひとりに課せられた社会的責任であると考えます。
12. このような内容の文章を、2月2日発行の読売新聞栃木版の「とちぎ寸言」に書かせていただきました。私は以上のような考えを持っていますが、皆さんはどのようにお考えでしょうか。この財政危機の中、どのようにして福祉社会を実現するかの一つの考えとして参考にしていただければと思います。

— 2011年10月27日改訂 —